
ゼットとアウラ (WILD ARMS Alter code:F より)

雪花舞莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼットとアウラ（WILD ARMS Alter code：Fより）

【Nコード】

N9268P

【作者名】

雪花舞莉

【あらすじ】

WILD ARMS Alter code：Fに出てくるゼットとアウラの物語です。

短編の連作です。

一つだけ決まっていることは、二人は死んでしまっけど、それでも幸せだったということです。

目指せラブコメ！

結婚初夜の物語

天からは多くの祝福が降り注ぎ、花びらが舞い落ちる。

おめでとう、おめでとう！

その声は遠くまで響き渡り、彼の、彼女の、運命を照らし出す。

照らし出した、わけだけど。

「アウラさん？」

ベッドに座りこむ男と女。否。

ベッドに座りこんだ女と、立ち尽くす魔族一匹。

「その、ハレンチな格好はなんなんだー！！」

魔族一匹、否、ゼットが口に手をあてて叫んだ。明後日の方向に。

「はい。ジェーンさんにいただきました」

ベッドの女、否、アウラ、もとい、白いネグリジェ（しかもまるで

下着のようだ！）を着た花嫁が穏やかに返す。

「待て待て待てーい。ジェーン？知っているようで知らない名前。

そう。答えは、他人だ！他人から物をもらってはいけないと、子供

時分に習っただろう！」

ビシッと自ら口に出して放った効果音とともに、人差し指で示すが、

視線は一か月先の方向である。

「いいえ。ジェーンさんはお友達ですよ？」

誰の、とはもちろん言わない。

「はっ。これは幻だな。そうだ幻に違いない。お茶の間のアイドルもとんだ不覚。不可抗力。幻にやられるようでは、修行が足りん！」

ガンガンと柱に頭をぶつける音がリアルに響く。

「…似合わなかったでしょうか…」

花嫁は結婚した夜に、この衣裳を着て寝るのよ

せつかくジェーンさんにもらったのに：俯く、天使（この際、ゼットには小悪魔）

「似合うに決まってるだろーが！」

コンマ0・1の速さで怒鳴るゼットの声は、まだ少し遠くから聞こえる。

「でも…」

「俺は今、闘っている！今までで一番の戦闘だ！！あのモンスターゼットも上回るほどの裏技！PTA、教育委員会、倫理委員会、紳士協定が俺の味方なのだ！」

「???」

理解していない風のアウラ。うなだれた首筋がやけに白く、まぶしく、ゼットに突き刺さる。

「アウラちゃん?!」

突然、気配が間近に迫った。

「はい?!」

驚くアウラ。

その肩にゼットの手がかかり。

2時間経過。

「…つまりこうして、アダムとイブは出会い、俺と君もりんごになったわけで」

うつらうつらしていたアウラの体が傾く。

それを、うつてかわった優しさで包み込むと、目にも止まらぬ速さで毛布をかけ、体を覆ってしまう。

「ふう」

似合わないシリアスなため息は意外に重く、額の汗をぬぐう。

（勝ったよ！ 何にかわからないけど、俺は勝ったんだー！！）

とりあえず天に向かって叫んでみたあと、静かに横たえたアウラの寝顔を見る。

額にかかる金色の髪に触れ、

（まったく俺も変わったよな）

何故。とは考えない。

「おやすみ。俺の奥さん」

口づけを、ひとつ。

そんな物語。

帰ってくる日

帰ってくるのは必然。

では、待っているのは？

「テレビの前のよい子も首を長くして、ついでに正座して待っていた！お茶の間アイドル、ゼット様、登場！ていや！」
ストン。

「あれは何だ？鳥か？ジェット機か？惜しい！いやいや、ゼット様、登場！シャキン」
トスン。

・・・

「ていうかさー。早く帰りなよ」

後方数メートルで、他人の振りをしていたハンペンが呟く。

「まったく。ここでこんなことしてる時間はないはずなんだが」
腕を組むザックに、頷くロディ。

アーデルハイドに戻ろうとした仲間たちを、ゼットが泣きの一手で引き止め、半ば無理やり引きずってきたのだ。

「なんだと？十数年来の友人にその言い草はないんじゃないかな？
冷たい、冷たすぎるぞ、氷河期のように冷たい」

「ていうか、あいつは本当に魔族なのか？」

「だんだん不安になってきたよ」

セント・セントールに戻ってきて、30分。

その門の前で、ゼットはずーっと足踏みしていた。

「違う！断じて、ノー！だ。これは、華麗なる登場のリハーサルだ。
予習に復讐はつきものなのだ」

「間違ってるよ。・・・ザック、そろそろ助けてあげたら？」

「そうだな。不本意だが、こんな時間の無駄もないな。ロディ」
ロディも同意している。

「「せえの」」
「ムギー」

アウラはいつものように外に出ていた。

見ることはできないけど、太陽の光、風の強さ、それらすべてを感じるため。

街に魔物がいなくなつてから、少しずつ人も増えてきた。

人々と交流しながらも、アウラはこの日課をかかさなかった。

それは、唯一つの約束のため。

鳥の声を聞いていたとき、懐かしい気配が後ろを横切ったような気がした。

慌てて振り返るが、跡形もなく消えている。

また……。少し落ち込むが、顔をあげる。

そこに一瞬の風が吹く。

「・・・この気配・・・ゼットさんですか？」

「お、おう。そうだ。呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃ・・・うわ？」

「！」

抱きつかれた衝撃で多少ふらつくが、慌てて支える。

（何？なぜに積極的?!）

明らかに尻つぼむゼット。

数か月前に別れたはずのアウラは、変わらない笑顔で。

少しの逡巡の後。

「あー。なんだその、魔族はいなくなつた」

「はい」

「で、俺も無い頭で、いろいろ考えたんだけど」

頭をかきながら、言葉をひねりだす。

俺は魔族で、君はニンゲンで。

もう魔族はいなくて。

魔族は、必要なくて。

「おかえりなさい」

「え？」

「おかえりを待っていました」

当たり前のように。

ここに戻ってくるのが当然のように。

「お、おう」

帰ってくるのは必然。

そして、待っているのは。

貴方と私はただ一つの約束で繋がっていた。

離れるときも、離れたあとも、何かを為し得たときも、失ったときも。

約束は彼らを一つにするでしょう。

その繋がりは永遠になるでしょう。

君が微笑んで、僕が戦うなら。

貴方がいればそれだけで 前編

「赤ちゃん…」

爆弾は落とされた。唐突に。自然に。止まることなく。

「何？何かの冗談でなくて？」

ハンペンの二割増しの冷笑が突き刺さる今日この頃。皆様、いかがお過ごしでしょうか。

よい子のみんなは、アイスの食べ過ぎでお腹を壊してないかな？お茶の間アイドルの俺様は、今。世界が破滅するより、ビックで、ビックバーンなクライシスに陥ってるから、よく見ておくんだぞ

「俺は冗談は言わない・・・」

「生き方が冗談だからな」

「じゃなくて！」

ザックに叫んでみても、誰も信じてくれない。

ここはアーデルハイドにある酒屋。俺様の危機に駆けつけてくれた友の名前は、ロディにザック、そしてハンペンだ。

「どう思う？ロディ」

大親友も首をかしげるばかりなり、だ。

つまるところ、俺様の重大な話は、よい子にもわかるように説明すると、こういうことだ。

あれであれな俺の大切な子であるところのアウラに元気がなかった。心配になった俺様は、一晩滝に打たれて考えたところ、誰もが気づかないような重大な事実気づいた。

アウラは、何か欲しいものがあるに違いない！と。

「その飛躍がおかしいと思うんだけど」

「じゃあ、他に何かあるのかよ！」

「それは…お前がうるさかいとか」

「ない！」

まったく。ハンペンとザツクの漫才には、さすがの俺様でもついていけないぜ。

「それで、ゼットが欲しいものを聞いたら」

「アウラが赤ちゃんて、答えたってか？」

「そうだ！」

ビシッと指さして、決めのポーズ。

「「ない」だろ」

そう。あの夜。俺は椅子に座って、静かに宙を見ているように見えるアウラに、それとなく声をかけたんだ。

「アウラ」

「ゼットさん？どうかしましたか？」

立ち上がりかけたアウラを慌てて制する。

「いや。そのまままで。実は、その、話があって…」

「はい」

いざとなると、何がこんなに難しいんだってくらい、言葉が出てこない。

「あのさー。何か、さ。欲しいものとか、ある？」

「え？」

「いや。何かプレゼント、したいなーって。そう！どうやら俺様は、プレゼントしたい病にかかってしまったみたいなんだ」

俺の言葉に、アウラが笑った。

「とくには思いつかないけど…」

「けど？」

「赤ちゃん…」

その瞬間の俺様は、雷に打たれ、天使のファンファーレが鳴り響き、花火として打ち上げられたような気分だった。

「何かの聞き間違いじゃないの？」

「お茶の間のスーパーアイドルは、遠くで呼んでる声も聞こえるのだ」

そうしてアウラの願いを叶えるために生まれてきた俺は、大親友達に赤ちゃんの作り方を聞きにきたわけで。

「というか、待てよ」

ザックが飲んでいた酒のコップをドン。と、テーブルに置いた。

「いいか。お前は魔族だ」

ロディと二人で頷く。

「ロディ。耳をふさいでろ」

ロディが不思議そうにしながら、耳をふさぐのを確認して続ける。

「聞きたくはない、聞きたくはないが、そういう行為をしたとしてだ」

「何の話？」

本気でよくわからない俺をハンペンが頭突きしてくる。

「サイテーだね！」

「え。だから、何？」

「お前、子種はあるのか？」

「コダネ？」

なぜかひっくり返っているロディを置いて、ザックが説明してくれることによると。どうやら、「実験」のことを言っているらしい。

「ジッケン？そっちのほうの意味不明だよ」

「ていうか魔族のくせに、手慣れたることのほうに俺には謎だよ」

「だって俺、「実験」、よくしてたし」

ニンゲンの体に入り込むために、ニンゲンのことを知る必要があった。その一貫で、「実験」というのがあって、俺はよくその任務についてた。それがニンゲンの求愛活動の一つだということは知ってたけど。

まさか赤ちゃんができるなんて！

「赤ちゃんてさ。あの、子供のことだろ？」

「まあ、そうだ」

「俺達は、マザーから生まれてきたら、ニンゲンがアウラから生まれてくるって知らなかった」

「アウラっていうよりさー」

ハンペンが俺様の頭をたたく。

「女性から産まれるんだろ？」

貴方がいればそれだけで 後編

俺様はまた一つ賢くなった。ニンゲンは「実験」によって、赤ちゃんができること。それには「コダネ」が必要なこと。俺には…コダネは…ないんだってこと。

「じゃあ、どうすればいいんだ？コダネをもらってくればいいの？」

「そしたら、お前の子供じゃないだろ」

「というより、アウラが嫌だろうしね」

「もしかして、もしかすると、アウラは俺にコダネがあることを知らないんじゃない？」

「まあ、そういう可能性もあるよな」

「ロディー……！」

ひっくり返っているロディーの体を起して、揺さぶる。

どうして、俺にはコダネがないんだー。

とにかくアウラと話し合え、という言葉に、うんと頷いて、いつもなら星より速く帰るんだけど、とぼとぼ歩く帰り道。

俺はずーっと考えてた。

アウラは赤ちゃんがほしい。俺には叶えられない。どうしたら。

どうすればアウラの願いを叶えることができるんだろう。

どうして俺は

ニンゲンじゃないんだろう。

「お帰りなさい」

寝ないで帰った俺を、いつものように笑顔で迎えてくれるアウラ。

「…うん」

俺は静かにアウラに近づいて、その白くてちっちゃな手をとった。

「あのさ」

「はい」

「俺、アウラにしてあげられることはなんだろうって、すごい考えて。それで」

ちっちゃな手の上にそーっと置く。

「これ。全然、ダメだけど、アウラの欲しいものあげられないけど、それでも、もし」

許してくれるなら。

「これは…？」

アウラにあげたのは、人形というものだった。しかも俺の手作り。女の子達に教えてもらって、はじめて針と糸っていうの持って、それはそれは人形を見たことなかったんだけど、明らかにこれじゃないだろう！っていうような出来の悪さだった。縫い目は大きいし、ぼこぼこしてるし、中身出てるし。

でも、俺が最初から最後までやった。

「こっちが子アウラ」

左手の指を触って教える。ほっぺが赤くて、髪の毛が長いのが子アウラ。

「こっちが子ゼット」

右手の上。本当は決めポーズさせたかったんだけど、腕があがらなくて、ビローンと伸びちゃったのが子ゼット。

「こあうら…？こぜっと…」

「うん。俺らの子供が、もし、いたら、こんな感じかなって」

それから全部がスローモーションで。

俺の視界の隅で、キラッと光るものがあって、思わずそっちを見たら、アウラが笑顔で。

「ありがとう」

思わず、抱きしめた。

「でも、どうして？」

ソファに二人並んで、幸せな時間。アウラはボロボロの人形を、大

切そうに抱きしめていた。俺はそれだけで、嬉しくて嬉しくて。質問の意味がよくわからなかった。

「え？」

賢いアウラはそれだけで全部わかったみたいで。

「もしかして、この前私が、赤ちゃんに何をプレゼントすればいいか聞いたからですか？」

「…え?!」

赤ちゃんに何をプレゼントすればいいか？

「あ、あ、あー？」

「ど、どうしたんですか？落ち着いてください」
慌てて、俺の背中を撫でてくれる。

ありがとう。俺のビューティーハニー。

「アウラ、赤ちゃんがいるの?!」

俺にはコダネがないのに?!ミラクル？

「え」

ポカンとするアウラ。それから、可愛く吹きだして。

「ゼットさんは、本当におもしろいですね」

ううん。全然、おもしろくないよ。

「俺、真面目だよ？」

「ごめんなさい」

アウラも真面目な顔して、姿勢を正す。

「私には赤ちゃんはいません」

「どういうこと?!」

それからアウラが言うことには。

町の夫婦に赤ちゃんが生まれると。

アウラはその人達と仲が良くて、何をプレゼントすればいいかずっと考えていたと。

「赤ちゃん…に何をあげたらいいか悩んでいて。今、プレゼントって言ったら、それしか思い浮かびません」の後半部分を、どうやら俺様としたことが、すっかりさんで聞き逃していたらしい。

「子アウラと子ゼット。私がもらっていいですか？」

「もちのろんだ！」

むしろ、アウラ以外にはあげたくないっていうか、さすがの俺様でもあげられない。

「この世に生まれてくる赤ちゃんには、別のお人形さんをあげますね」

「おう」

アウラの悩みも晴れて、俺様はプレゼントもできて、まったく今日は大安というか吉日だな！と俺は思ったわけで。

アウラ。

はい。

赤ちゃん…欲しい？

…よく、よくわかりません。
うん。

欲しくないというわけではないと思うのですが、私は体が弱いので、きつと産むことはできないし、それに。

貴方がいればそれだけで 後編（後書き）

切なさ成分上昇中。。。。

風邪をひいた 前編

俺様の大事なあれであれであるところのアウラが、風邪というのをひいた。

これはヒジョーなクライシスである。

俺はこんな時こそ助け合うべきだと、友人のところへ飛んだ。

「って、また俺かよ！」

イケずな友を必死で引っ張っているのに、ザックは真面目な顔して踏みとどまった。

「俺じゃなくて、医者だ」

というわけで、友と、イシヤを連れて帰る。

「ゼットさん？」

「ただいま、アウラ。安心しろ。こいつはヨボヨボだけど、確かな腕だ」

「？」

熱があるのに起き上がるうとするアウラを必死で止めて、状況を伝える。

「つーか医者だ。医者連れてきた」

「こんにちは、ザックさん」

「お前はゆつくり休め」

なぜだかついてきたザックが邪魔なので（「お前が連れてきたんだろーが！」）、薬を出してくれた医者とともに帰す。

「ゼットさん？」

呼ばれたので、慌てて枕もとに行くと、

「側に、いてくれませんか？」

ズキューンという音がした。襲撃？いや違う。俺様のハートが撃ちぬかれたんだ。

「当たり前だ」

手を握って、寝顔を見ていると、今までになかった気持ちになる。

抱きしめなくなる。

これがニンゲンのいう恋なのだろうか。

でも、ザックが帰り際に、「いいか。風邪はな。休息が一番なんだ。休まっていうのはな。おいしいものを食べて、ゆっくり寝て休むことだ。いいか。絶対に無理をさせるな！」とかなんとか叫んでいたので、俺はぐぐぐとこらえた。

「早く良くなってくれよ」

でも、アウラの熱はなかなか下がらなかった。

薬は医者が出してくれたし、ベッドはあるから、問題は「おいしいもの」だ。

俺は別に飯なんか食わなくても平気なんだけど、アウラはそうはいかない。

いつもはアウラが魔法みたいに作ってるんだけど、そのアウラは風邪だし、ゆっくり休まなくちゃいけないし…。

「ザックの奴…なんで帰ったんだ！」

まったく気の利かない友人である。

「アーデルハイドに行くには時間がかかるし…」

俺様の力があれば一時間くらいで行けるだろうが、そばにいるって言ったから…。

俺様はアウラが寝ているのを確認して、家を出た。万が一、目が覚めたとしても、光の速度で家に帰れるように、気は配っておく。

町の奴らは、俺を見ると、一目散に逃げていく。中には、攻撃しようとしてくる奴もいる。当たり前だ。俺は魔族なんだから。俺も別に気にしなかった。たぶん、人間を傷つけるとアウラが悲しむだろうから、攻撃されても避けて終わりだ。

けど、この非常事態にそれは厄介な問題である。なんとかして、アウラにご飯を食べさせなければならぬ。

「やあ！ お茶の間アイドルゼット様だぞ」

試しに屋根の上から登場してみたが、「や」ぐらいで逃げられてし

まった。挨拶は最後まで聞けよな。

そのまま屋根の上に腰かけて、町全体を眺める。何とかアウラが病気であることを伝えたい。

でも俺は魔族だから、「ニンゲンを傷つける」以外の方法を思いつかなかった。

日も暮れてきて、晩飯の時間である。アウラはぐっすり寝てるが、そろそろ起きるだろう。俺はまだ屋根の上にいた。

もういつそ、この家でも襲って、晩飯を盗むぞ！と三万六千回くらい思った。でも、アウラは喜ばない。それだけはわかった。

どうしよう。俺様が途方にくれていると、「お兄ちゃん」

下から小さな声がした。

「ん？」

声の方を見れば、小さいニンゲンが3人集まって、俺を呼んでいる。

「魔族のおにーちゃん」

「なんだ？」

降りてみると、怯えたように後ずさる。怖がるなら呼ぶなよ。

俺様の怒りが伝わったのか、一番後ろにいた女が泣き出す。おいおいおい。お茶の間アイドルの俺様でもいい加減怒るぞ。

面倒くさいので無視しようとする。

「何かあったの？」

さっきから俺を呼んでる男が声をかけてきた。

「ん？」

振り返ると、男は詰まりながら、

「さ、さっきからそこにいるから！」

と、屋根の上を指差した。

「おまえんち？」

「ち、違うよ。モモの家」

泣いてる女を指差す。

「そっか。悪かったな」

一応、モモに謝る。

「何かあったんでしょ!」

モモの隣にいた女が突然叫んだ。今度は俺様が驚く。

「だって、いつも一緒のアウラねーちゃんをほっておくなんて、おかしい!」

「ミミの言う通りだ」

俺様は感動した。

「おまえら…小さいのに、頭いいな!」

「そ、そう?」

「俺様と話してるし、いい度胸だ!」

よし。俺様も覚悟を決める。

「実は、アウラが病気なんだ」

「お姉ちゃんが?!」

小さいニンゲン達は、アウラが心配なのか、俺のまわりに集まってきた。

「風邪、という病気らしい」

「熱はあるの?」

「ある」

俺様の言葉に、深刻な顔になる。

「そんな大変なのに、アウラねーちゃんをほつといていいのかよ!」

「アウラは寝てる」

「そういう問題じゃないでしょ!」

ミミも怒り出す。

「おにちゃんは、何してたの?」

今まで泣いていたモモが俺の袖を引っ張った。

「おにちゃん?」

「お兄ちゃんのことだよ」

男（名前はタケルというらしい）が説明してくれた。

「そうか。おにちゃんは、アウラのご飯を探しにきたんだ」

「そうだったの?!」

ミミもタケルも驚く。

「そうだ。けど、話しかけても皆逃げるし、だからあそこにて、考えてた」

タケル達は輪になって、ひそひそと話しはじめる。

「どうする？」

「ウソは言っていないみたいだけど…」

「おねーちゃんがたいへん」

「そうだよな。アウラねーちゃんのためだもんな」

「何かこの人、噂と違って、いい人そうだし…」

会議はまとまったらしい。

「俺達にご飯を持ってくるよ」

「そつか！助かる！ちなみに俺様の名前はゼット様だ」

風邪をひいた 後編

強力な味方を得た俺様は、家の裏で待っていた。断じて、コソコソという訳ではない！ 堂々と家の裏で待っていたのだ。

しかし結果はアンビリバボーだった。戦利品は、ミミが持ってきたパンのみだったのである。

「ごめん…カーちゃんに見つかっちゃって」
「ううう、しょうがない！」

隊長としては、隊員の失敗も、あたたかく見守らねばならない。

「明日もう一回、がんばるから」

「モモもがんばる！」

明日では遅い気もしたが、隊員の心意気を買ってこそ、真のマスターである。俺様は頷いた。

「皆の者、がんばる…」

「そこで何をしている！」

せつかくの俺様の号令をさえぎる声がした。敵か？味方か？ むむ。百パー敵だ！

見れば、ニンゲンたちが固まって、こちらに武器をかまえている。

「こ、子供たちを離せ！」

「もう話してるぞ」

「ち、違うよ、にーちゃん！」

タケルが俺に耳打ちする。

「にーちゃんが悪者だと思われてる！」

なぜだ？！と考えるほど俺様は馬鹿ではないので、答えは簡単だな。俺様が魔族だから。

さて、どうしたものか。

「おとなしくしろ！」

タケル達を見ると、

「とーちゃん、違うんだ！」

「大丈夫だ！今助けるぞ！」

間違いを正そうとしてくれてるみたいだけど、まあ。無理だよな。ここはさっさと逃げるが勝ちだな。と、回れ右をしようとしたその時。

パンっ！

乾いた音がした。どうやら、ニンゲンが発砲したらしい。

ところがどうしたことが、その弾道が俺様ではなく、モモに向かっているではないか！

「あんの、馬鹿！」

そこでお茶の間のヒーローでもある俺様は、かつこよく飛び出し、モモを抱え、弾道を避ける！はずだったのだが、見事に失敗して、銃弾を肩にくらってしまった。

熱い、弾けるような痛みが襲う。

「痛い！」

またしてもかつちょ悪いことに、痛さを隠せなかった。

「にーちゃん！」

「大丈夫?!」

モモは泣き出すし、タケルもミニもパニックで、俺の肩に触ろうとしてきた。

「触るな！」

俺の血はニンゲンには良くない。小さいのが触ったら、もっと良くないに決まってる。

ミニの手をはねのけ、ニンゲンに叫ぶ。ムカつくから！

「おまえらな！相手を見て撃てよ！相手はこっち……」

俺様がこれから30分間、俺様の俺様による説教をしようとした、今度はその時。

アウラが起きる気配がした。

「アウラ……」

俺はモモを捨て置き、アウラの元に飛ぶ！ヒーローは守るべきものを守るのだ！

後ろの方で、泣いてるタケル達を囲むニンゲンの声が聞こえてきた。
「あの娘みたいに、洗脳されおって」

光より速く走り（こんなに走ったのは、あの時以来だ）、何とかアウラが目覚める瞬間、そばにいることができた。ふう。危機三髪。
「ゼットさん？」

「具合はどう？」

「ええ。だいぶ…」

アウラの視線が止まる。はっ。俺としたことが、止血するのを忘れた。み、見えてない！見えてないはずだ！！

「ゼットさん！けがしています！」

…そうなのだ。アウラはどんなかすり傷でも、例えば俺様が気付かないような傷でも、すぐに見つけてしまうのだ。

「うん。ちよつと転んだ」

「血が…」

触れようとした手を握りしめ、「ごめん」と謝る。

「ちよつと治してくるね」

そばにいるって約束したのに、俺は離れて、居間の薬箱を手取る。別に薬なんか飲まなくなつて、止血しなくなつて、死なないし、すぐに治るんだけど、きつとアウラが心配するから。

約束も守れなくて、アウラに心配かけて、アウラのご飯も持ってこない。俺様ってなんて役立たずなんだろう。

「…ゼットさん？」

「アウラ？！お、起きあがっちゃダメだ。ゆっくり寝て、おいしいもの…」

「涙が…」

アウラが俺の顔に手を触れて、俺ははじめて、目から水が出てるところに気がついた。

おかしいな。俺、どっか壊れたのかな。

「何かあったのですか？」

アウラが困った顔してる。

ごめん。アウラ、ごめん。

馬鹿だから、俺は気づかなかった。

アウラがどうして町から離れたところに住んでいたのか。

俺は、自分だけが嫌われてると思ってたから、そんなの無視すればいいんだって思ってた。

でも一緒にいると、アウラまで悪者になっちゃうんだ。

アウラはニンゲンなのに。すぐキレイなニンゲンなのに！

本当は謝りたかった。けど、目から水が出てるとしゃべれないみたいだ。

アウラは背伸びして、俺の頭をなでてくれた。
トントン。

しばらくして、扉をたたく音が聞こえてきた。

「誰かしら」

俺が出て行こうとしたけど、アウラに「ちゃんと手当してください！」と怒られてしまった。

こんな時にも迷惑かけちゃうなんて、俺様はヒーロー失格だな。降板だ。今すぐに降板だ。

「ゼットさん、来てください」

「どうした？」

呼ばれて行ってみると、扉の前にはタケル達がいた。

「にーちゃん。大丈夫か？！」

タケルが俺に抱きついてきた。

「俺様は大丈夫だけど…モモは？」

「モモもだいじょうぶ！」

ミミとモモも俺の傷を見ようとする。いや、引っ張ると痛いんだけど。

「俺達、ちゃんと言ったからな！にーちゃん悪くないって言ったから！」

「お母さんがゼットさんに謝ってくださいって」

「これ、頂きました」

アウラが手に持っていた籠を持ち上げる。

「ゼットさんが頼んでくれたんですね。ありがとうございます」

「ごはん、もってきたよ！」

…俺、ちょっとは役に立ったのかな？

HOME (前書き)

すみません。シリアス全開です。

HOME

ぼくのおとうさんは、殺されました。

ぼくが赤ちゃんのころ、おおきな戦いがあつて、そこで魔族に殺されました。

魔族はいつぴきをのこして、いなくなりました。

おとうさんは、殺されました。

いつぴきの魔族は、まだ、生きています。

朝起きて、まずやることは、顔を洗うこと。

近くに流れてる川で、顔を洗って、ついでに口もうがいます。

それからすぐに、地面に落ちてる鉄を拾いに行く。

これが僕の仕事。

たくさん拾える時もある。少しの時もある。

それを親方に持って行くと、いくらかのお金をくれる。

それが僕の食べ物になる。

昼ごはんは、丘の上で食べる。

僕は固いパンを飲み込む。

僕と同じ年くらいの子供が遊んでるのが見えることもある。

子供たちは僕を見ると、指をさして、何かヒソヒソ言い合う。

そうすると僕は、パンを持って走る。

逃げてるわけじゃないよ。

僕は一緒には遊べないし、同情もされたくない。

それだけなんだ。

僕にはお気に入り場所がある。

町を出て、少し行ったところに、森がある。

森の中には湖があるんだけど、そこに行く道は、人間の手が入っていて、木のベンチが置かれている。

そこに座って空を見上げると、葉っぱが光をうけて、キラキラしている。

そのキラキラを見ると、天国はこんな感じなのかなって思う。

おとうさんのいる天国は、こんなふうにキラキラしてるのかな。

僕はさっきみたいなのがあると、必ずこの場所に来て、上を見ることにしてるんだ。

おとうさんと同じ場所に行けるような気がするからね。

一匹の魔族は、僕が寝起きする町に住んでいる。

なるべく見ないようにしてるんだけど、たまに目に入ってくることもある。

そうすると僕は、持っていた鉄を投げる。

お金になる鉄だけど、僕はそれしか持ってないから。

魔族は噂のとおり、弱っているのかもしれない。

僕が投げた鉄でも、見事に当たる。

「いてっ。何だ、これは。サプライズ？ 神様のプレゼント？ 人

気者は困るな」

魔族はわけのわからない言葉をしゃべる。

そのまま、どこかへ行ってしまう。

今日もやつつけられなかった。

僕は一人になる。

「お前、兄ちゃんに何するんだよ！」

帰ろうとした僕の前に、立ちはだかる子供達がいた。

僕と同じ年くらいの男の子と、年長の女の子、年少の女の子。

「何だよ」

負けじと僕もにらむ。

「おにちゃんに石ぶつけた!」

小さい女の子が真赤な顔で、手をグーにして叫ぶ。

「魔族に石投げて、何が悪いんだ」

石じゃないけど。

「何だと?!」

男の子がつかみかかってくるのを待ち構えてると、

「やめなさいよ」

年長の女の子が止めに入ってきた。

「あなた、いつもゼットさんに物を投げてるわね」

冷静な態度が、怒りを伝えてくる。

「悪いかよ」

「悪いに決まってるんだろ!」

「あなた、ゼットさんが気づいてないかとも思ってるかもしれないけど、本当は気づいてるんだからね」

「そつだ。お前なんかすぐにやつつけられるんだ!」

「魔族は!」

思わず、怒鳴り返していた。

「そつやって、人間の命をゴミみたいに扱っただ!」

「うえー!」

僕の剣幕に、女の子が泣き出す。

呆然とする二人を残して、僕は走った。

早く。

早く、あの場所に行かなくちゃ。

やっとの思いで森に辿り着いた僕は、いつものベンチを見つけて、体が震えた。

そこには先客がいた。

魔族と、見たことのない、一人の女。

怒りなのか何なのか、胸の真ん中が苦しくなる。

魔族が女に話しかけ、女は笑う。
光が二人を照らす。

僕は膝をつき、草をむしった。
爪に土が入るのもかまわなかった。

魔族が！

魔族が僕の場所を汚した！

しばらくすると、魔族と女は立ち上がり、湖の方へ歩き出した。
それでも僕は動けないでいた。

吐き気でうずくまっている僕の目の前に、誰かが立った。

のろのろと顔を上げると、それは魔族だった。

驚きで後ずさる。

「なんだよ！」

「いやー。まあ、あれだ。言いたいことがあつて来てみたら、具合が悪そうだったので、さすがの俺様もどうしたものかと考えたわけ
で」

「殺すなら殺せよ！」

最後の抵抗で、草を投げる。

どうせ死ぬんだ。少しでもやり返したい。

「うーん。言いたいことはあれど、優先順位は119番。人の命
は一度だけ」

魔族は手をグーパーさせる。

僕は手当たり次第、暴れる。

「飛び立て、俺サマー！！」

意味のなさない掛け声とともに、気づくと僕は、魔族の肩にかつが
れていた。

「何すんだよ！」

暴れても、びくともしない。

ついに僕も殺されるんだ。

せめて、おとうさんと同じ、天国に行けたらいいな。

諦めて目を閉じたら、何かが光った。

そして目を開けると、そこは天国・・・ではなくて、ベッドの上だった。

「栄養のあるものを食べさせなさい」

白いヒゲのおじいさんが言う。

「栄養とは、つまり、おいしいものだな？！　つまり、風邪か！」

「風邪じゃないが、そんなところだ。では、さらば」

おじいさんは出て行ってしまう、魔族が俺の横に立っている。

起き上がろうとした僕のおでこに、魔族が手を乗せた。

「よかったな。風邪は、おいしいものを食べれば治るんだ。そして

俺様は、おいしいものに関してはプロだ」

風邪じゃないんですけど。

突っ込もうとした僕の上に、魔族の真剣な声が落ちてきた。

「もうすぐアウラが来る。俺に石を投げてもいいけど、アウラには

投げてはダメだ。わかるな？　アウラはニンゲンだからな。そこを

間違えたらいけない。俺様はそれを言うために、颯爽と登場したわけだ」

「・・・え？」

「俺様は、何があってもアウラを守るけど、人間を傷つけたら、ア

ウラが泣く。俺様は、アウラを泣かせたくないんだ」

落ちてきた魔族の声は、僕の深い所に沁みていく。

こうして僕はこの場所で暮らすことになった。

僕と、魔族と、アウラの生活は、たった数年しか続かなかった。

約束を返す。

魔族はそう言っ、僕の頭を撫でた。

緑の中にある細い道を、魔族と一人の女が歩いている。

（ぼくのおとうさんは、殺されました。）

二人はベンチに座る。

（ぼくが赤ちゃんのころ、おおきな戦いがあつて、そこで魔族に殺されました。）

魔族は女に話かけ、女は笑う。

（魔族はいつぴきをのこして、いなくなりました。）

光が二人を照らす。

（おとうさんは、殺されました。）

ゼットの緑の髪が光る。

（魔族は、まだ　　）

目を閉じると、あの時の光が蘇る。
そこはきつと、天国に違いないのだ。

透明な光（前書き）

すみません。残酷な表現が混ざっています。

ゼットさんの性格が、オリジナルから百億光年離れたことをご了承ください。

透明な光

その日、俺は気分が悪かった。
違う。

自分で自分をコントロールできなかった。
月の影響か、たまに俺はこういう状態になる。
自分の血の色が緑だと知る時。
そしてそれに罪悪感さえ感じない時。

「お前、ゼットだな」

セント・セントールで男たちに囲まれた。

「だったら？」

ついてない。舌打ちする。どっちが？

「大人しくついてこい」

外れにある建物の裏に連れて行かれる。

「魔物が！ いい気になってんじゃねーよ！」

突き飛ばされ、殴られ、蹴られる。

あーもう。イライラするなあ。

「お前さあ。女と住んでるんだろ？」

髪の毛を掴まれ、持ち上げられる。

「変わった女もいるもんだなあ。どうだ？ 具合は。俺 がはっ」

これ以上言葉を発してほしくなくて、首と胴体を切り刻む。

赤い血しぶきが上がるはずなのに、まわりが白黒になる。声もよく聞こえない。

生ぬるい温度が皮膚の上をつたっていく。

感じる。冷え切った体の奥が興奮している。

飛びかかってくる男を地面に叩きつぶし、逃げる男たちの足を切る。
体に染みついていいる動作だ。機械的に動ける。

「た、助けてくれ」

失禁したらしい男の急所に足を乗せる。

「お前。ここの人間？」

「いや、お、俺たちはたまたま、ここに」

「そっか」

素直によかったと思う。でもここの人間だとしても、その時の俺にはたいした問題ではなかった。

「二度とここに来ない？」

「こ、来ない！ 約束する！」

「・・・女にも近付かない？」

「もちろんだ」

「じゃあ。約束の代わりに、大事なものを貰わないとね」

その場を消去するのも慣れたもので、しばらくやってないとか、そういうのは関係ないんだなあと思った。

徐々に色も戻ってきて、川で赤い血を流す。服についたものは消去したけど、体についたものはなんとなく洗いたかった。気持ちを落ち着かせるためにも。

だけど、そもそも気持ちは落ち着いていて、これが少し前の俺様だったんだなあと思う。今も見ない振りしてるだけの。

「川遊びには早いんじゃない？」

気配はしていたけど、声をかけられるとは思わなかった。

「ヒロか・・・」

俺の目を見て、どこかへ行くかと思ったのに、ヒロは近づいてくる。

「悪いけど、相手してる余裕ないから」

「あ。そう」

立ち去ってくれるかと思ったのに、距離を置いて座ってしまった。どこかへ行けというのも違う気がして、俺はそのまま水浴びを続ける。

「顔。まだついてる」

指摘されて、顔にも血がついてるのだと知った。

「うん・・・」

手で水をすくって、顔を洗う。

「俺、人間を殺した」

「だろうね」

「悪いと思ってない」

「魔族だしね」

そもそも同族を殺しても何も思わない。ましてや敵だと教えられていた人間を殺すことは、下手すると快感になってしまう。

アウラ。

そう。俺にとって、あまりにも特別なアウラが人間だったから。アウラの悲しむ顔を見たくないから。喜んでもらいたいから。少しでも笑ってほしいから。

アウラが大切にするセント・セントールを、そこに住む人間を、守ると決めたのだ。

なのに、こんな天候なんだか気温なんだか、月のものか知らないけど、簡単に左右されて、禁を犯してしまう。あまりにも簡単で、弱くて、汚れてる。

「別にいいんじゃないの」

ヒコの声に感情は混じってない。

「お前の親も、魔族に殺されたんだろ？」

「それはまあ、今考えても許せないけど、ゼットが殺したわけじゃないし」

「俺かもよ？」

アウラに会う前は、命令があれば、もちろんなくても、会えば人間を殺してた。

その中にヒコの親がいてもおかしくない。

「僕に何言わせたいのか知らないけど、僕はゼットじゃないと思う

よ」

帰るんだろ？ タケルの所に行くから。ご飯いらないって伝えて。それだけ言っで、さっさと行ってしまおう。

俺は川の中で、ぼーっとしていた。

アウラに会う理由なんて、ないと思ってたのに。

家に着いて、ドアを開けると、待っていたかのようにアウラが立っていた。

「お帰りなさい」

「うん」

水は蒸発させたので、乾いてる。

だから、わかるはずがない。俺が何をしてきたのか、知られるはずもない。

なのに、アウラの姿を見て、理由はわからないけど震えた。全身の細胞みたいなものが、震えた。

「アウラ」

「はい」

「抱きしめていい？」

返事も聞かず、その小さい体を引き寄せる。

触っちゃだめとか、アウラも汚れちゃうとか、そういう考えの前に、とにかく触れていたかった。

あつたかくて、いい匂いがする。

髪の毛に口づけたまま、俺はずっと震えてた。

アウラがゆっくりと、俺の背中に手をまわすのがわかった。

「大丈夫」

ポンポンと、背中を叩かれる。

「大丈夫ですよ、ゼットさん」

ニンゲンを殺したことは、俺が土に返っても言わないだろう。
これからも殺すかもしれない。そのことに罪悪感もない。

例えロディ達に知られたとしても、アウラには絶対知られないように
にする。

約束する。

俺は魔族で、アウラは天使だ。

アウラが共有することは何も無い。

俺の罪は俺だけのもの。

アウラがあつたかいのなら大丈夫。

大事なのはそれだけだ。

謝らない。その代わり、許しも乞わない。
ただ、側にいさせて。

透明な光〜後日談

「夕飯いらないつつたろーが！」

「そうだったけ？」

晩飯の時間だ。晩御飯は皆で食べるものなのだと俺様が忙しい時間を縫って、わざわざ迎えに行ったというのに、ヒロはむくれている。むむ。これは噂に聞く、反抗期というやつか？ おやじと風呂に入らないというあれか？？

「風呂には一緒に入ろう！」

がしつと肩をつかむ。反抗期はあたたかい目で見てあげなくてはいけないのだ。

「・・・何言つてんだ！」

さすがは反抗期。すぐさま払いのけられる。

「え。ヒロって、兄ちゃんとお風呂入ってるの？」

「なわけねーだろ！」

「いやいや。恥ずかしがらなくとも」

「じゃあ、いつだよ？ いつお前と風呂に入った？」

「・・・」

確かに。まだ風呂に入ったことはなかったな。そうか。それが問題か。

「じゃあ、今すぐ入ろう！」

「話を聞けー！！」

反抗期はそのままタケルの家泊まると言い始めた。

仕方ない。あたたかい目で以下略だ。

俺様はアウラの元へ帰るとするか。

タケルの家

タケル「おい。兄ちゃん、本当に具合が悪かったのか？」

ヒロ「・・・さっきまではそうだったんだけど、アウラに会ったら

元のバカに戻ったみたいだ・・・」

タケル「良かったじゃねえか」

ヒロ「良かったというか、どっちに転がっても悪いというか・・・」
タケル「ま。お前が兄ちゃんと風呂に入ってることは、モモ達には秘密にしてやるから」

ヒロ「だから違うつて!!」

アウラの家

アウラ「え。ヒロが反抗期ですか？」

ゼット「そうなのだ。あいつも大人になったな」

アウラ「えと・・・具体的にどういう・・・」

ゼット「晩飯はいらねえ。風呂には入らねえと言うから、俺様はあたたかい目で見てやったのだ」

アウラ「（ヒロにかぎってそんなこと・・・）タケルのお家の方に迷惑かけてないといいけど・・・」

ゼット「そうだな！俺様が明日朝一番に様子を見に行つて、窓ガラスが割れていないかチェックしまくるぞ！」

アウラ「（ゼットさん、楽しそう・・・お父さんになった気分なのかしら？）」

透明な光〜後日談（後書き）

ゼットさんが二重人格男になりましたことを、改めてお詫び申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9268p/>

ゼットとアウラ（WILD ARMS Alter code:Fより）

2011年2月11日21時29分発行